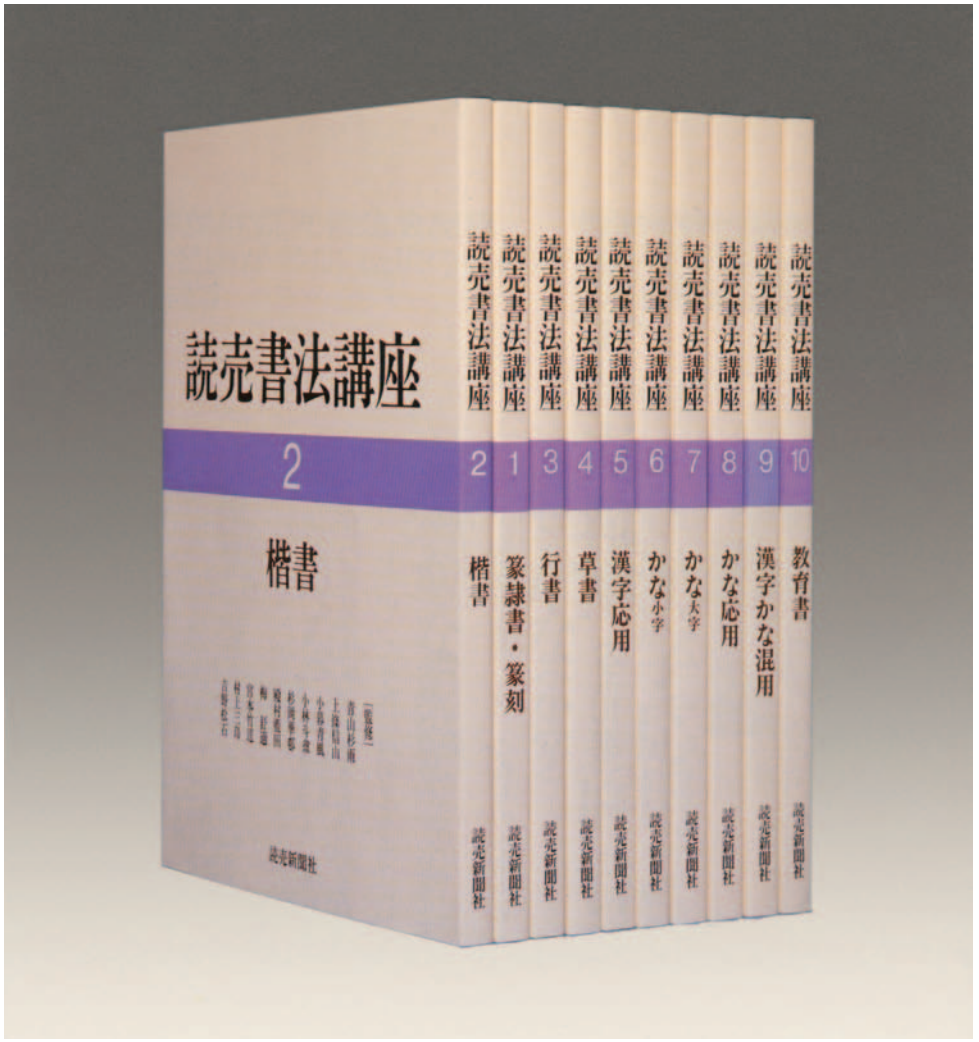
トナンの仕事

書籍・雑誌など

有限会社トナン

http://www.tonan.jp



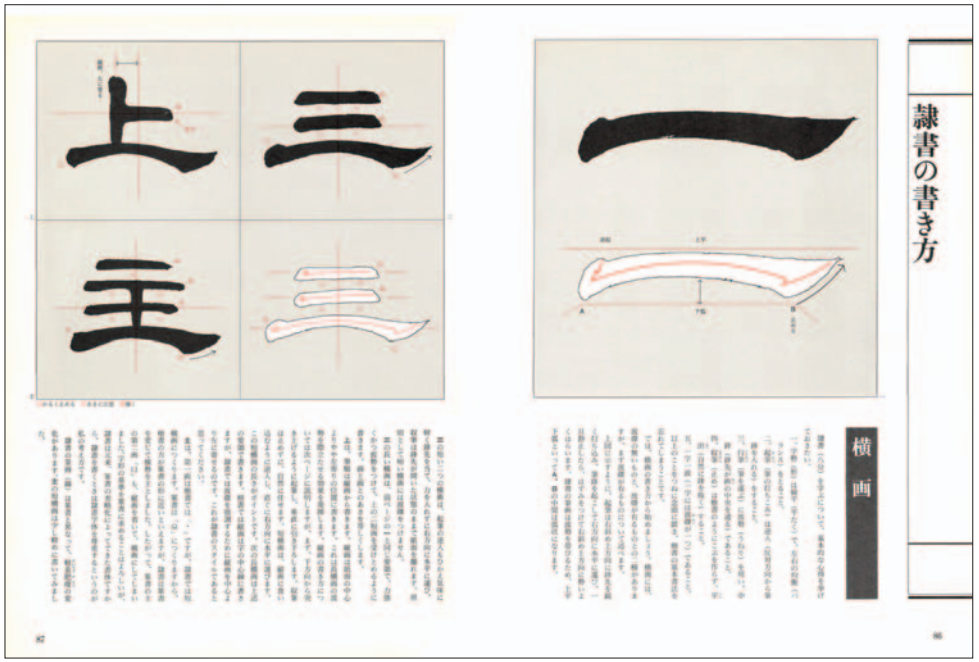
読売書法講座（全十巻）1988～1993

大熊が道吉デザイン研究室で修行していたときに担当になり、フリーランスになった後も大熊が担当することになった。全十巻を拵えるのに5年かかった。

青山杉雨、村上三島、小林斗盦、杉岡華邨、成瀬映山、淺見筧洞、今井凌雪、梅原清山、栗原蘆水、高木聖鶴、日比野光鳳、古谷蒼韻（敬称略）などのお歴々と直接打ち合わせをした。特に青山杉雨さんとは、たびたびお目にかかり、お宅にうかがい食事をご馳走になったり、晩年は、闘病中の病室で校正を見ていただいた。その直後、青山さんは文化勲章を受章した。

組版設計・本文デザイン・装丁：道吉剛 / 大熊肇（tonan）

「楷書」の青山杉雨さんのページ。半紙の比率の枠のちょうど良いところに字を入れるのが意外にむずかしい



「篆書・隷書」の隷書の書き方のページ。書は谷村憙斎さん、赤の骨書きは大熊の手書き

矢島峰月の書 1995 芸術新聞社

尊敬する書家・矢島峰月さんの作品集。パリで行われた個展にも同行させていただいた。
石川九楊さんが書評を寄せている。

編集・組版設計・DTP組版・装丁：大熊肇（tonan） テキスト入力・校正：中妻祐子（tonan）

天地玄黄 宇宙洪荒
Tenchigenkou Uchukokou 1982

16

無
Mu 1989

17

些事を語ろう
矢島峰月作品集に寄せて

石川九楊

Let's Talk about Mundane Affairs
Comments about "A Collection of Calligraphic Works by Yajima Hogetsu"

Ishikawa Kyuyo

矢島峰月とは、彼が日書美、毎日展で活躍中に、当時僕らが出版していた『雨蘭』『批評』『思脈』という雑誌を媒介に知り合った。実際に顔を合わせることになった仲介者は光琳堂・山口光政である。以来15年以上に渡り、彼の主宰する毎月1回、月例の研究会で書について講じ、語り合っている書友である。

若くして書壇に登場し、あまりにも早く書壇を知り、その行末を察知してしまったせいか、矢島は1979年、数人の仲間と共に日書美、毎日展を脱退した。端から見ていて少々唐突にも思え、「辞めなくてもいいのになァ」という感想はあった。もうその頃は僕は、書壇に属していようといまいと大した問題ではないと思っていたのだが、彼らには脱退することが新しい出発として不可避の行動だったようだ。退会は同時に師・伊藤崇山との訣別を意味した。師のもとを去る時の大きな苦渋について、何年か後に聞いたことがある。

現在は雑誌『蒼流』を刊行する「蒼流社」を拠点に、その主宰者として習字教育に一石を投じている。習字教育をおろそかにせず、そこに書への思いを注ぎこんでいる。雑誌に掲載される参考手本の主たる部分は必ず自らが筆をとる。しかも、書の歴史に根拠をもつべしという考えから、『九成宮醴泉銘』をモデルに、筆触の張りつめた端正な手本である。信頼できる教育機関だから、僕の書塾生が開塾を希望した時には、必ず蒼流社への参加を奨め、その下で習字教育に携わるように指導している。

矢島峰月は、書がよく解り、書のよく見える書家である。目の覚めるような示唆を受けることも少なくない。『六朝諸行書論』などは彼からの指摘によるものだ。その矢島峰月が、近年発表してきた作品からなる作品集をつくるのだという。これを機会に、彼の作品を見直してみた。

＊ ＊ ＊

作品集でどれだけ伝わるか解らぬが、矢島の書はとても気字の大きな書である。馬力のある筆触、大胆な構成、それでいて書線は熟し、つややかである。作品を見て「うまいなァ」と感じることも多い。しかし、これでいいのだという安心感をもてず、一抹の危なっかしさを感じることもまた確かである。それは何故なのだろうか。

矢島の書、とりわけその書を象徴する最大のものは筆触の極限を定着しようとする意志であろう。筆鋒を極限まで圧し開き、対象をさぐり、根こそぎ掘り返す。かと思えば、筆尖だけで表面に少し切り込み、筋をつけるような筆触が同居していて、両者が混在したり、交互に出現したりするのだ。極を知る書道家は少ない。その中で矢島は際立っている。

根こそぎ掘り起こし掘り返すことと、細い筋目を入れることとの両極を武器に矢島は世界と闘うわけだが、この両極をもつことが矢島の作品の最大の長所であり、時にはそれが短所ともなっている。

おそらく矢島は両極の手応えから、筆触の奥行き、深さ、そのサイズを感じとっている。だが、世界ー対象の深さと性質はつかみようがないほど複雑であり、微妙である。把えたと思った時から対象ー世界は逃げているのだから、それを探りあてるためには、細大の用意を持ち、あらゆる手法を注ぎこんで世界ー対象を把えることが必要だ。しかし、言うまでもなく、書にせよ何にせよ、その内実は、両極にではなく、その中間地帯にこそある。

怠惰な書道家はその中間のどこかを描いてみせることはあってもその両極の存在を知らぬ。矢島の書は両極を知る点で、月並の書道家を凌駕しているが、その中間をなぜか避けているように見える。僕の考えでは、おそらく矢島はこの中間帯を、習字帯域と考え、習字の参考手本による表現でこの帯域を埋めているからだと思われる。矢島の中間帯域、つまり日常は書道の指導書にあり、書の歴史を問い、それを考察し、歴史的正系の書を伝えることにある。ところが、いったん制作に向かった時、その自己のあり方に否定的になるのではなかろうか。それが制作の時に筆触を両極の極端に走らせる。この時、両極は、中間帯域を豊穣にするというよりも、中間

102

Yajima Hogetsu is a *shoka* (calligrapher) with a good grasp and appreciation of *sho*. On occasions I get my eyes opened by his words or opinions. The Rikucho-sho Gyosho Theory (Rikucho Period, 5th-6th centuries) was one such opinion. I was told that Yajima Hogetsu, with the background as mentioned above, is going to publish a collection of his works done in recent years. I have taken this opportunity to review his past works.

＊ ＊ ＊

While I am not certain how well it could communicate to people, his *sho* is of a grand scale, being of powerful *hisshola* and bold composition, but yet with well matured and freshly rich lines. Often I am impressed with his good hand; however, on the other hand, it is true that I cannot feel fully comfortable with his *sho*, but feel a shade of uneasiness. Why is it, I wonder.

The strongest feature in Yajima's *sho* is in his will to pursue the extreme limits of *hisshola*——push forward to the extremes, search them, and uproot their bases. At times, on the other hand, he writes as if to incise the surface lightly with the tip of the brush and score lines. His *sho* is a mixture of these different *hisshola* or sometimes their alternate appearances. Only few *shodoka* (calligrapher) have a grasp and understanding of the extremes-Yajima is outstanding in that respect. The uprooting and the incising of light lines——using these two extremes as a weapon, he struggles with the world. Having these extremes is his best feature, but at times it becomes his shortcoming.

Yajima may have the feeling that he is getting to the quintessence of *hisshola* by feeling out its size, length and depth. But he should realize that the depth and true nature of the world or the object is inscrutably intricate and delicate. To get to it he must use every possible means of approach. He should be aware that, the moment he thinks he has it, it could slip out of his hand——the truth is that elusive. Needless to say, however, whether in *sho* or any other subject, the truth lies somewhere in the intermediate zone. Lazy *shodoka* can write *sho* belonging to the intermediate zone, but do not know the existence of the two extremes. Yajima exceeds other mediocre *shodoka* in the grasp and understanding of the extremes, but it seems to me that he is shunning the intermediate zone.

Why? It is my thought he is considering the zone as the *shuji* area (*shuji* stands for practicing *sho*), thus being content with expressions made through *tehon*. The intermediate zone, in his notion, it is in everyday tehon and teaching, and what's more, is pursuing, observing, and passing on the historically orthodox

103

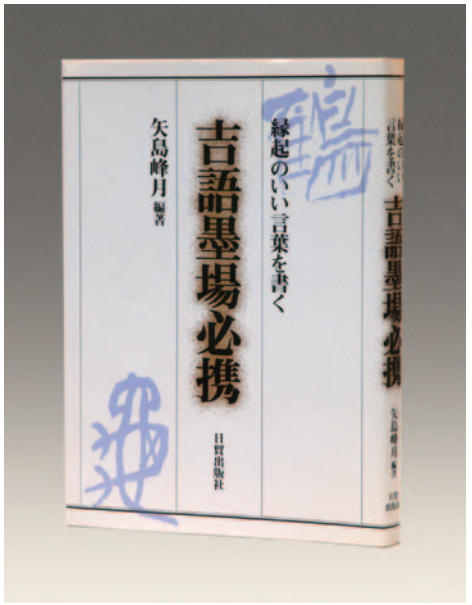
※昔のデータなのでOCFフォントの再現が忠実ではありません

らくらく筆ぺん入門 矢島峰月著　日貿出版社　1988

17年経っても売れ続けているロングセラー。右ページの4点もすべて重版出来。

装丁：大熊肇（tonan）

「篆刻墨場必携」 矢島峰月編著　日貿出版社　1990
装丁：大熊肇（tonan）



「吉語墨場必携」 矢島峰月編著　日貿出版社　1995
装丁：大熊肇（tonan）

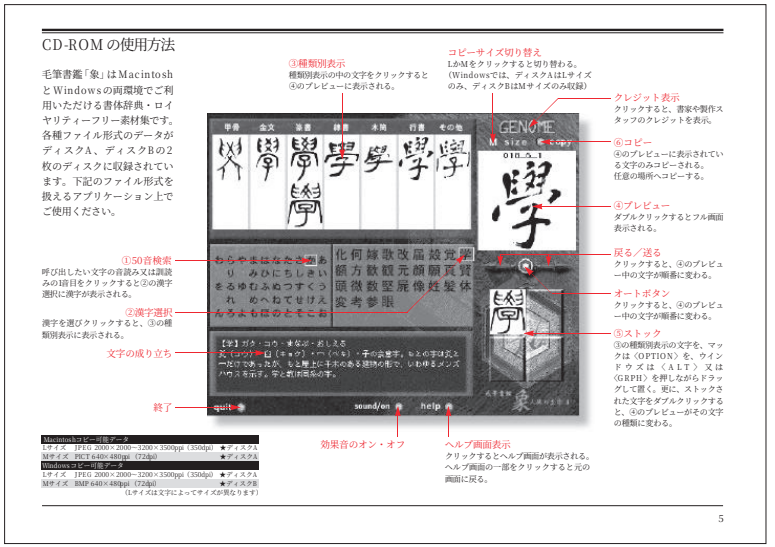
「福語墨場必携」 矢島峰月編著　日貿出版社　2001
装丁：大熊肇（tonan）

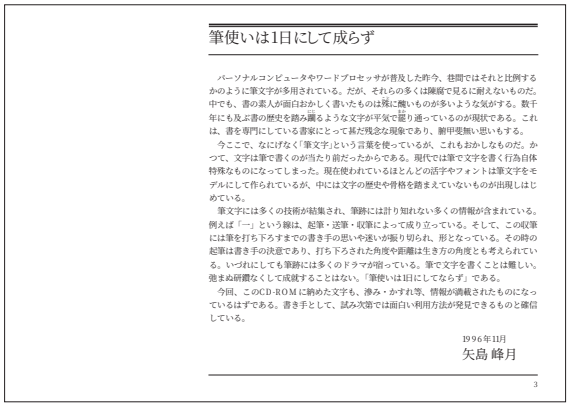
「禅語墨場必携」 矢島峰月編著　日貿出版社　2004
装丁：大熊肇（tonan）

毛筆書鑑 象　矢島峰月書　A&Pコーディネータージャパン　1997

コンテンツプロデューサーの飯島敬一さんと、筆文字画像の素材集を企画し、A&Pコーディネータージャパン（現デザインエクスチェンジ）の社長の藤井さんに直接売り込んだ。
世界初の筆文字素材集である。だが時代が早すぎたのかあまり売れなかった。

企画・構成・デザイン：大熊肇（tonan）





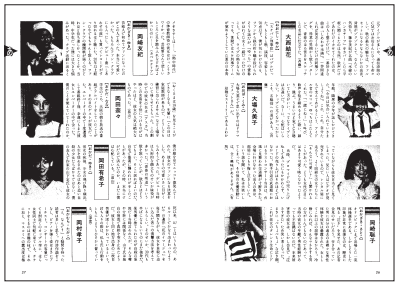
※昔のデータなのでOCFフォントの再現が忠実ではありません

「毛筆書鑑 象 別巻」　矢島峰月書
A&Pコーディネータージャパン　1997
企画・構成・デザイン：大熊肇（tonan）

アイドルぐりぐり大事典　読売新聞社　1993

写真だとコーネル装の上製本に見えるが、厚さ7〜8ミリのムック。コーネル装の本を写真撮影して印刷した。
当時の非力なMacintoshでフルDTPに挑んだ。
ちなみに大熊も著者のひとり。

コーネル装の撮影・組版設計・DTP組版・装丁：大熊肇（tonan）



テレビごくらく大事典　読売新聞社　1993

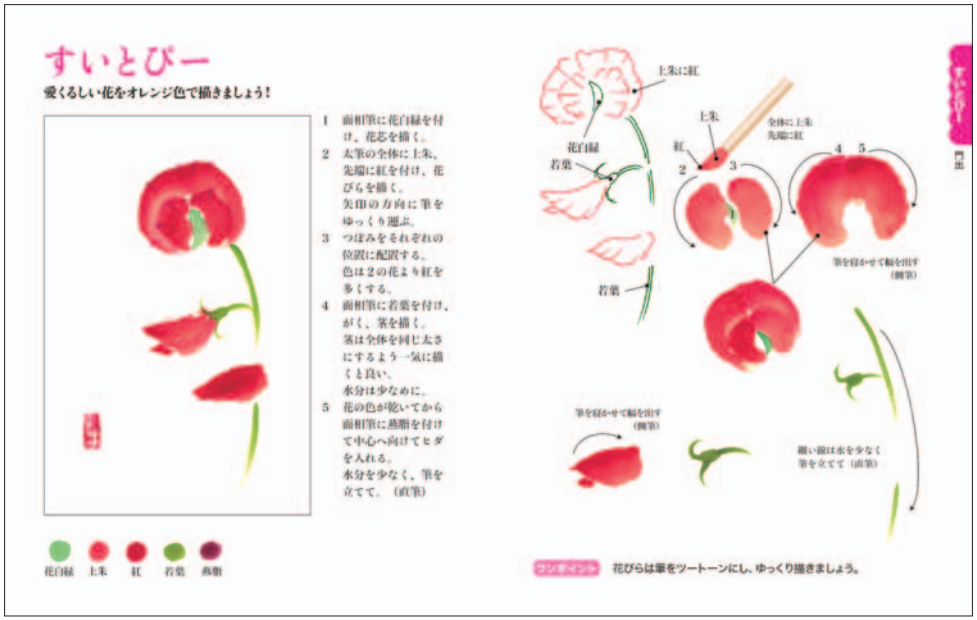
悪ふざけして、こんなムックも作った。タイトルは中村不折の「いろは帖」を参考にして、ゴシック風にレタリングした。このムック、探しているコレクターがいるらしい。

イラスト：大田晴子　DTP組版・装丁・題字：大熊肇（tonan）

花のおたより　菅田とも子　誠文堂新光社　2003

日本画家の菅田とも子さんとはじめてお会いしたとき、何冊か著書を拝見して、「絵はいいけど、デザインがひどいですね」と失礼なことを言ってしまった。そうしたら、「そうなのよ、今度本を出すときは大熊さんデザインしてくれる?」とおっしゃった。しばらくしたら、「本出すからデザインお願いね」というわけでこの本を拵えることに。

組版設計・DTP組版・装丁：大熊肇（tonan）



好評だったので、続編が4冊できました。

大相撲　読売新聞社

創刊50年を超える歴史のある雑誌。20世紀中は何と鉛活字で印刷していた。
1999年から大熊が表紙のデザインを担当している。2004年からDTP化にともない、本文の一部もデザインしている。

大相撲 36

昨年からご紹介頂いております、朝青龍の動向取材。場所中はもちろんのこと、初場所前の稽古場や巡業中にいたるまで様々なパターンから密着させて頂きました。高砂親方（元小結若嶋津）の番組欠席のもあったが、私用でスーツ着用など、多くは目にしられるほどのことでもないものまでオールに報道されました。しかしマスコミがあおり立て過熱の中、朝青龍はすべての雑音を自己暗示する精神、バーフェクトV4を達成、土俵外のトラブルの禁止対し、その際立つ強さに対し、素直に相手を認めるファンもあり、そんな大横綱への道を歩み始めた「喜ぶオオカミに、どのような現で初場所に臨み、十五日間を戦い抜いたのか、本音を聞いた。

全勝優勝は入門した時からの夢

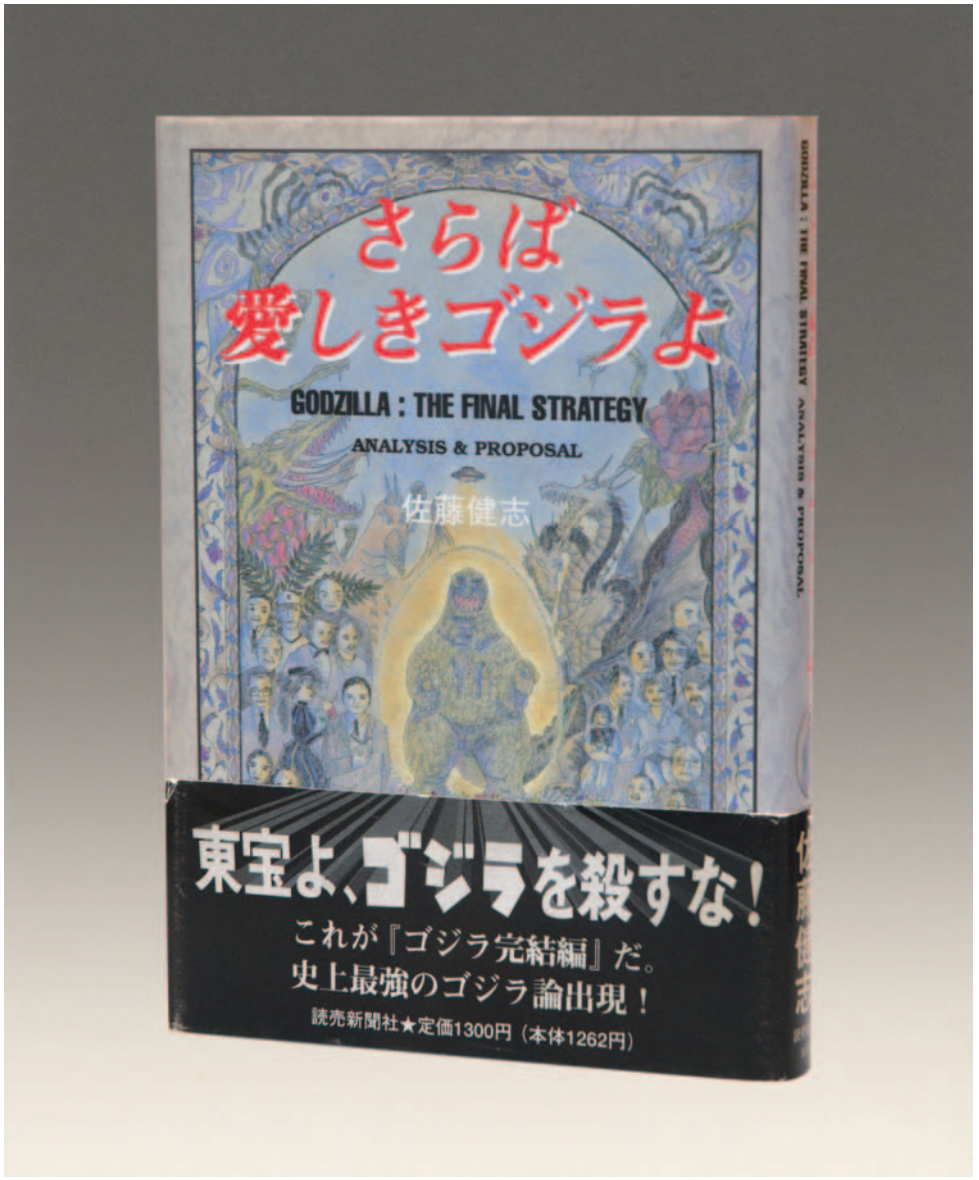
――初場所は危ないの相撲が一番もなれたんですか？　相撲を取っていて、先代、高砂親方（元大関若嶋津）の番組欠席のもあったが、私用でスーツ着用など、多くは目にしられるほどのことでもないものまでオールに報道されました。しかしマスコミがあおり立て過熱の中、朝青龍はすべての雑音を自己暗示する精神、バーフェクトV4を達成、土俵外のトラブルの禁止対し、その際立つ強さに対し、素直に相手を認めるファンもあり、そんな大横綱への道を歩み始めた「喜ぶオオカミに、どのような現で初場所に臨み、十五日間を戦い抜いたのか、本音を聞いた。

――全勝優勝は一横綱にとってひとつの目標だったんですよね？

「入門した時からの夢だったからね。いつかはいたいと思っていたので。今年の目標にもしたんだ」

――その目標を最初の場所でも達成されたわけですね。

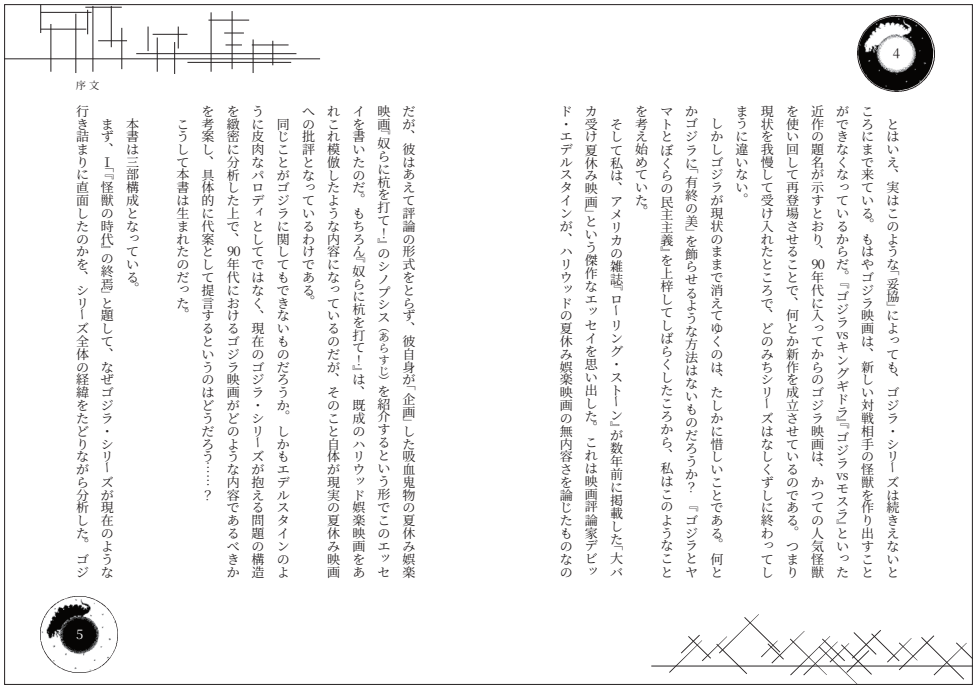
「そうだね、目標というのは、常に高くないと。優勝（平成15年初場所）、琴光喜（優勝）、千代大海（優勝）、栃東（優勝）、魁皇（優勝）、雅山（優勝）、武蔵丸（優勝）、貴乃花（優勝）、若乃花（優勝）、曙（優勝）、貴ノ浪（優勝）、北勝海（優勝）、千代の富士（優勝）、北の湖（優勝）、輪島（優勝）、若三杉（優勝）、大乃国（優勝）、旭富士（優勝）、霧島（優勝）、琴風（優勝）、寺尾（優勝）、若嶋津（優勝）、旭国（優勝）、栃錦（優勝）、若乃花（優勝）、千代の山（優勝）、東富士（優勝）、羽黒山（優勝）、照国（優勝）、前田山（優勝）、玉錦（優勝）、双葉山（優勝）、男女ノ川（優勝）、常ノ花（優勝）、栃木山（優勝）、梅ヶ谷（優勝）、大錦（優勝）、小錦（優勝）、曙（優勝）、武蔵丸（優勝）、貴乃花（優勝）、若乃花（優勝）、千代大海（優勝）、琴光喜（優勝）、魁皇（優勝）、雅山（優勝）、栃東（優勝）、千代の富士（優勝）、北勝海



さらば愛しきゴジラよ　佐藤健志著　読売新聞社　1993

Macintoshの漢字TALK7とQuarkXPress3.1によるフルDTP。各ページのイラストを少しずつ回転させ、地球にしがみついたゴジラがパラパラマンガで回転する。つらかった。なにしろメモリが20MB程度なんだから。なんどフリーズしたことか。

装画：東田亜希　組版設計・DTP組版・装丁：大熊肇（tonan）



とはいえ、実はこのような「妥協」によっても、ゴジラ・シリーズは続きえないところにまで来ている。もはやゴジラ映画は、新しい対戦相手の怪獣を作り出すことができなくなっているからだ。『ゴジラvsキングギドラ』『ゴジラvsモスラ』といった近作の題名が示すとおり、90年代に入ってからのゴジラ映画は、かつての人気怪獣を使い回して再登場させることで、何とか新作を成立させているのである。つまり現状を我慢して受け入れたところで、どのみちシリーズはなしくずしに終わってしまうに違いない。

しかしゴジラが現状のままで消えてゆくのは、たしかに惜しいことである。何とかゴジラに「有終の美」を飾らせるような方法はないものだろうか？『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』を上梓してしばらくしたころから、私はこのようなことを考え始めていた。

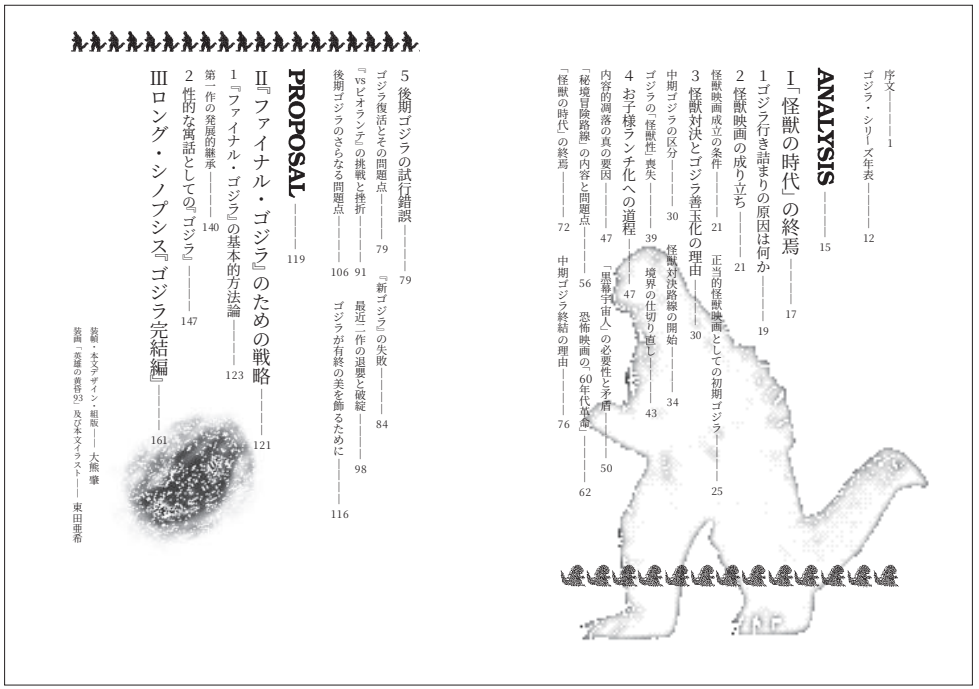
そして私は、アメリカの雑誌『ローリング・ストーン』が数年前に掲載した「大バカ受け夏休み映画」という傑作なエッセイを思い出した。これは映画評論家デビッド・エデルスタインが、ハリウッドの夏休み娯楽映画の無内容さを論じたものなのだが、彼はあえて評論の形式をとらず、彼自身が「企画」した吸血鬼物の夏休み娯楽映画「奴らに杭を打て！」のシノプシス（あらすじ）を紹介するという形でこのエッセイを書いたのだ。もちろん「奴らに杭を打て！」は、既成のハリウッド娯楽映画をあれこれ模倣したような内容になっているのだが、そのこと自体が現実の夏休み映画への批評となっているわけである。

同じことがゴジラに関してもできないものだろうか。しかもエデルスタインのように皮肉なパロディとしてではなく、現在のゴジラ・シリーズが抱える問題の構造を緻密に分析した上で、90年代におけるゴジラ映画がどのような内容であるべきかを考案し、具体的に代案として提言するというのはどうだろう……？

こうして本書は生まれたのだった。

本書は三部構成となっている。

まず、I「怪獣の時代」の終焉」と題して、なぜゴジラ・シリーズが現在のような行き詰まりに直面したのかを、シリーズ全体の経緯をたどりながら分析した。ゴジ



序文——1
ゴジラ・シリーズ年表——12
ANALYSIS——15
I「怪獣の時代」の終焉——15
1 ゴジラ行き詰まりの原因は何か——17
2 怪獣映画の成り立ち——19
怪獣映画成立の条件——21　正当的怪獣映画としての初期ゴジラ——25
3 怪獣対決とゴジラ善玉化の理由——30
中期ゴジラの区分——30　怪獣対決路線の開始——34
ゴジラの「怪獣性」喪失——39　境界の仕切り直し——43
4 お子様ランチ化への道程——47
内容的凋落の真の要因——47　「思春期青年団」の必要性と矛盾——50
「秘境冒険路線」の内容と問題点——56　恐怖映画の「60年代革命」——62
「怪獣の時代」の終焉——72　中期ゴジラ終結の理由——76
PROPOSAL——119
II『ファイナル・ゴジラ』のための戦略——121
1『ファイナル・ゴジラ』の基本的方法論——123
第一作の発展的継承——123
2 性的な寓話としての「ゴジラ」——140
III ロング・シノプシス『ゴジラ完結編』——147
5 後期ゴジラの試行錯誤——79
ゴジラ復活とその問題点——79　『新ゴジラ』の失敗——84
『vsビオランテ』の挑戦と挫折——91　最近二作の退歩と破綻——98
後期ゴジラのさらなる問題点——106　ゴジラが有終の美を飾るために——116

装幀・本文デザイン・組版——大熊肇
装画・巻頭の黄昏93及び本文イラスト——東田亜希

※昔のデータなのでOCFフォントの再現が忠実ではありません

建築巨人 伊藤忠太 読売新聞社編　読売新聞社　1990

Architectを建築と訳し、法隆寺が世界最古の木造建築であることを発見。築地本願寺や平安神宮、明治神宮を設計。芸術院会員と学士院会員の両方になったスーパーマン伊東忠太。以前、編集者が「知ってるつもり」に持ちかけたところ「涙をさそう話か、教訓になる話がないと……」といわれたらしい。カバーは1色刷り。QuarkXPressによるDTP。

組版設計・DTP組版・装丁：大熊肇（tonan）

目次

前口上 編集部――八
クライン・ボトルとしてのモダン
――伊東忠太へのオマージュ 藤原惠洋――一〇
一世一代のロマンチスト
――伊東忠太という男 荒俣宏、藤森照信――一二
「忠太自叙画伝」（全文）――二九
日記「浮世の旅」を通してみた帝国大学生伊東忠太の学生生活
――稲葉信子――五五
父・伊東忠太を語る 伊東祐信――六六
伊東忠太のフィールドノートより――七〇
伊東忠太の建築作品をのぞいてみると……――七六
コラム 山下定――八一 畠山健二――八九 高田裕史――九三
阿部好宏――一〇三 小出正志――一一七
東京観光・忠太ツアー 長尾衣里子――一一八
伊東忠太建築作品一覧――一二〇
築地本願寺が現代に伝えるもの 飯島洋一――一二二
墓の建築家・伊東忠太 中島渉――一二四
伊東忠太建築文献選――一二七
忠太の隠れ技・時事漫画――一四四
同郷の漫画家・伊東忠太について ラズウェル細木――一五七
伊東忠太のかけらを探して 中谷礼仁――一五八
「熱河遺跡」調査保存計画の顛末 伊東祐信――一七四
伊東忠太建築文献選の続き――一八二
年譜 中谷礼仁――一九八
文献一覧 中谷礼仁――二〇二
関連人名小事典 編集部――二〇四

一世一代のロマンチスト 伊東忠太という男

荒俣宏（作家）
藤森照信（建築学）

●法隆寺のルーツを求めて探検の旅へ

藤森　伊東忠太は、当時を代表する建築家であり、建築史の学者でもあったわけですが、建築家としての作品でよく知られているのは、築地の本願寺です。あの異様な、一度見たら忘れられないインド風の寺院。それと、京都の平安神宮や、橿大学なんかも手がけている。

建築史の学者としては偉らのじいさんみたいなもので、日本の第一号、なにしろ、法隆寺が世界最古の木造建築だということを発見して、建築の歴史研究を最初に始めた人なんです。しかも、法隆寺の柱のエンタシスがギリシャのパルテノン神殿に似ていると言い出した後、面白いのは、ギリシャからエンタシスが伝わってきた跡を逆に辿って、ギリシャまで歩いてみようと思い立ってしまう。で、文部省からお金をもらって三年間、ロバに乗って中国からインド、アフガニスタンを抜けて、最後はイスタンブールにまで辿りつく。その結果、法隆寺のエンタシスがギリシャから来たかどうかはあまり明らかにはならなかったんだけどとにかくそんなふうにケタはずれの考え方をする人だったんですね。いまでもそうだけど、当時は特に、そんな考え方をする人は珍しかった。

荒俣　外国にはいましたけどね。例えば探検家のスウェン・ヘディン。彼はアレキサンダー大王の東征の跡を全部歩こう、そうすれば、当時世界がどのくらい進かったか、ヘレニズム文化がどこまで行っているかがわかるだろうというので、やはり中央アジアを歩いている。明治時代に

写真

仏教研究の目的で大谷探検隊を三度に渡って派遣した大谷光瑞なんかも、その影響をかなり受けていたようですが。

藤森　当時、ヨーロッパの列強が盛んに繰り出していた各国の探検隊を迎えうつような形で、伊東忠太や大谷探検隊が日本から中央アジアに向かって出掛けていった。

荒俣　その結果、ちょうどインドとかチベットのあたりでぶつかるわけね。たった一歩の違いで貴重な発見を先に持っていかれたとか、いろいろな問題が起こったりする。

藤森　中国の雲崗石窟なかも伊東忠太が最初に発見したんだけど、それを北京あたりでしゃべったのがフランスの学者に流れて、パリで大きく発表されちゃう。当時、フランスはベトナムに本拠地を置いて、すごい勢いでアジア研究をやっていたから、その網にまんまと引っかかったわけです。だから、伊東忠太の雲崗発見は、世界的にはあまり認められていない。

荒俣　伊東忠太が雲崗で何を見つけたかというと、やっぱり法隆寺を見つけたわけでしょう。あっ、こんなところに法隆寺があるじゃないかって。

藤森　そうそう。出掛しの勾欄とか、人字形の割り束とか、法隆寺のディテールが、あそこにはあるんです。

荒俣　伊東忠太は留学という名目でアジアに出掛けていくんだけど、当時、偉くなろうと思ったら、みんなヨーロッパなんですね。

藤森　アメリカでもダメです。まして、アジアなんかとんでもなかった。文部省にそんな金は出せないと言われるんだけど、一年間ごねにごねて、結局は予定の三分の二ぐらいをようやくもらって、出発する。行ってすぐに北京かなんかで雲崗になんかあるらしいと聞いて、そこでいきなり法隆寺を見つけちゃったものだから、すっかり喜んじゃって、現地でいろいろ講演をやったらしいんですね。そしたら、フランス人が聞いてて、すぐに二巻本を作っちゃったらしい。

そのころは期せずして西洋でも日本でも、文化のルーツを眺めようということで、アジアの真ん中で各国が組んづほぐれつの状態だった。一番大儲けしたのはイギリスで、敦煌

※昔のデータなのでOCFフォントの再現が忠実ではありません

志ん生！ 落語ワンダーランド　読売新聞社編　読売新聞社　1993

読売新聞社の名物編集者某が、落語の本の企画を3つ上に上げたところ、志ん生の本の企画だけが通った。どうしても3つの本を作りたかった某は、3冊文の原稿を1冊に詰め込むことを大熊に命じた。虫眼鏡がないととても読めない。組版をする方はもっとつらい。

組版設計・DTP組版：大熊肇＋中妻祐子（tonan）　題字・装丁：大熊肇（tonan）

落語ワンダーランド

志ん生！

目次

前口上 …… 2

Ⅰ 志ん生大好き！ …… 7

師・志ん生を語る　古今亭円菊　聞き手／鼎山健二 …… 8
私の・好きな・志ん生 …… 25
ムタの名人・志ん生　中野翠 …… 26
「あいよ」　横田順彌 …… 28
その芸は不可解で、永遠の謎　山本益也 …… 30
古今亭志ん生と私　パラダイス山元 …… 32
あの世からの志ん生通信　なぎら健壱 …… 34
志ん生展　尾成晴 …… 36
志ん生に会ったことはないけれど　高倉文紀 …… 38
川柳ぶっく古今亭志ん生と私　北原太 …… 40

志ん生の相手　矢吹申彦 …… 42
志ん生の魅力　鼎山健二 …… 44
いつもタバの志ん生ナンダ　遠山ひとし …… 46
132分52秒の「そこつ長屋」にはハマるのだ　根本敬 …… 48
キーワードで知る志ん生 …… 50
酒　八代目桂文楽　古今亭志ん生　三遊亭圓生　柳家金語楼
声論理　後藤　柳家三語楼　翁之丞　田辺南　小勝物　博打　師匠
系図で見る五代目志ん生の周辺　橘左近 …… 64
新聞で知る志ん生 …… 70
〈名人〉をメチャメチャにした名人　麻生芳伸 …… 74
五代目古今亭志ん生「年譜」 …… 84
これは便利！かな？　志ん生噺一覧 …… 88
キミは「動く志ん生」を見たくはないか！　山藤章二 …… 92

いま、注目の若手落語家 …… 132
立川志らく　三遊亭竜楽　三遊亭小円楽　三遊亭遊吉
立川談春　林家たい平　柳家喬太郎　三遊亭兼好
ある落語家のつましくも幸せな生活　三遊亭楽輔四 …… 143
強力！落語入門　通かなる落語への旅路　鼎山健二 …… 147
お笑いの世界は底なし沼だ。
まだまだいる変色物の人たち！　鼎山健二 …… 152
東京ボーイズ　あた順子　ひろし　林家ペー　玉川カルテット　笑組　国分健
玉川スミ　アンクルペイペイ　林家ペー　玉川カルテット　笑組　国分健
志ん生が目撃した空前絶後の落語的空間　根本敬 …… 158
私が目撃した空前絶後の落語的空間　根本敬 …… 158
落語から学べるもの　鼎山健二 …… 160

Ⅱ 落語で笑いまほう。 …… 95

わかりたい・あなたのための・落語の歴史　高田裕史 …… 96
コラム 女の子に落語を聞いてみた …… 97 99 101 103
笑いろいろな世界の女の子に落語について尋ね、最後に十人の落語家の人気投票をしてもらいました。その集計結果は巻末をご覧ください。
桂竹丸　桂三木助　三遊亭金翁　春風亭小朝　春風亭昇太
立川志の輔　立川らく次　立川談春　林家こぶ平　柳家小緑
どこにいったら聴けるの？寄席をのぞいたぞ …… 104
上野・鈴本演芸場　浅草演芸ホール　国立演芸場　池袋演芸場
新宿・末広亭
落語の魅力　鼎山健二 …… 110
都内で開かれている寄席案内 …… 112
コレならゼッタイいきたい!!
夢の定席番組表　鼎山健二×大友浩 …… 114
私と落語　永尾カルビ …… 130

Ⅲ 資料の盆踊り …… 163

「通」ぶれるこの落語を聴け！103選　高田裕史 …… 164
現代東京落語家人名小事典 …… 216
落語グッズ55選　大友浩 …… 232
〔おことわり〕
・本書は原則として江戸及び東京の落語世界を扱いました。
・本書は原則として敬称略としました。
・本書は江戸・明治期の落語世界を素材にしているため、当時の呼称を使用している個所があります。落語という伝統的話芸の世界を紹介する本書の意図をおくみとりいただきますようお願いいたします。

あの世からの志ん生通信

なぎら健壱

えーどうも何ですな、こっちの世界はお日さん照りありませんが"雲は耗、草木は鏡、日の影楽らにそよ吹く風に、妖なる天女の胡蝶のそれか……捉もあらず罪もない"ってなやつですな。罪はないが酒は豊富にある。まっアタシとしてはいうことなしでやっ、ありがてエやね。

しかしこっちに来た当初ってなア、そりゃあ楽しかったですな。いろんな師匠には会えるし、仲間にも入しぶり）ってな按配でな。当分はそれが面白かったンだけど、だんだんわずらわしくなっちゃった。だってそうでしょ、後から後からいろんな連中が挨拶しに来るから疲れていけねェ、天狗連まで顔を出すんだから。名前もよく知らない上方の人もいるから、松鶴さんあたりに教えてもらって。

えーでもまあ、後から来た連中も大変だって、アタシなんかもそうでしたけど、挨拶回りだけで気がやられちゃう。

だからア何です、傍から見てると面白い、円蔵さんは黒門町をしじゅうてる、円太郎さんも黒門町にこもってるから居心地が悪そうでね、えーでもって、その並河さんはって、心配してた円馬師匠に稽古をつけてもらってる。

松ちゃん。生涯名人と呼べるのはこの師匠だけだっていってた、円喬師匠と一緒に極楽席ってのをやってる。こっちじゃもうそんなことしないで、のんびりしてりゃいいようなもんなんだけど、根がほら、マジですから。

それでエアタシだって、その四代目の円喬が師匠ですから、挨拶に行ったンですよ、そしたら、アタシの師匠は小円朝だっていってンです。そういえばそうかなんて思って、しばらく考えていたンですが、面倒臭くなってそうですか）って帰って来ちゃった。でもなんですな、円喬師匠は五十歳前にこっちに来ちゃってるから、アタシとしてはなんとなくバツが悪いったらなかった。

アタシャもういいよ、たまに独演会でもやって、何も考えずお神酒いただいて、モートルやってりゃそれでいい。

だけど酒は早過ぎた……馬生は早過ぎたよ。五十五歳ってエじゃシャレになりゃしねェ。どう考えても早いやね。変わってやりたかったンだけど、アタシャもう死ンでるしね。

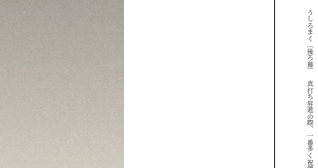
三平も馬の助も早過ぎた……。三平は正蔵さんに早過ぎた"ってガリ噛ってましたな。先代が中に入って、親子二代にわたって"どうもスミマセン"って謝ってる。こっちでも稲荷町はとんがってるからやンなっちゃう。でも大がらないからいいやね。

やンなっちゃうっていやあ、市馬がこっちでもセンがりっぱだって自慢して歩いてる。

そうだ小ん治に、えっそうか談志だって身体悪くしてからもよく、師匠、師匠"って家へ来てたもんな、こっちへ来たら最初に顔出せって言っといてくれ。

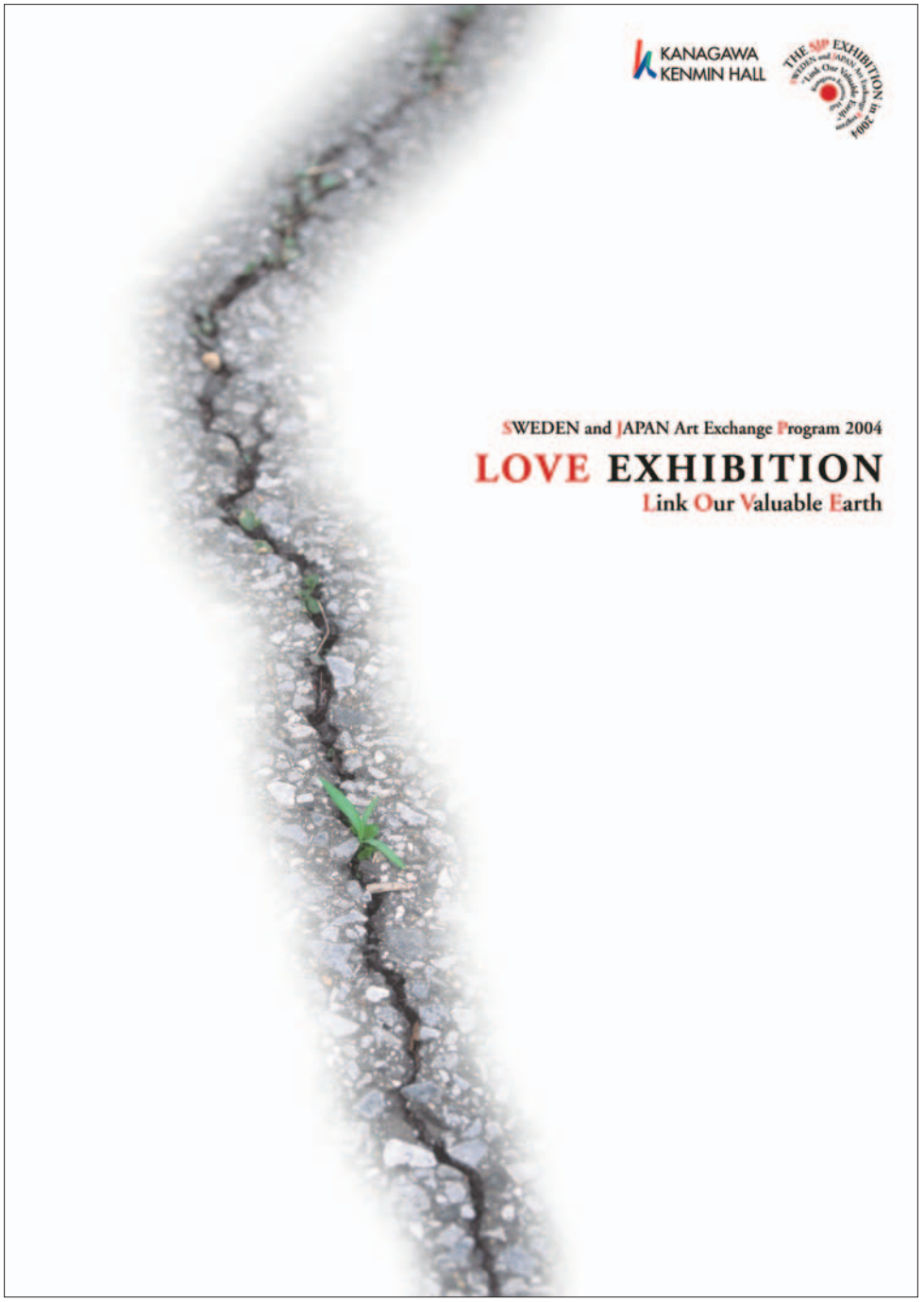
強次にも会いたいが、ヤツには志ん生を継いでもらいたいし、消もそう言ってくれたんだ。

それにしても談志には早く会いたい。えっもう時間かい、それじゃお後がよろしいようでってことで、えーみなさんとはこちらでまた……。



みんなあの世の人、ではなかった。前列左から初代昔昔亭桃太郎、志ん生、8代目桂文楽、後列右から6代目三遊亭円生、5代目柳家小さん（1953年）

※昔のデータなのでOCFフォントの再現が忠実ではありません



「LOVE展」カタログ表紙　2004　主催：日本SJP委員会　写真・デザイン：大熊肇（tonan）

Japan

大熊 肇
OKUMA, Hajime

風化した壁や錆びた鉄の表面、シミやデカルコマニー、木目など、偶然みつけたものを素材として、自らの肉体と表層の意識を隠し、深層の意識による「発見」と「選択」、「概念の変換」によって作品を制作している。

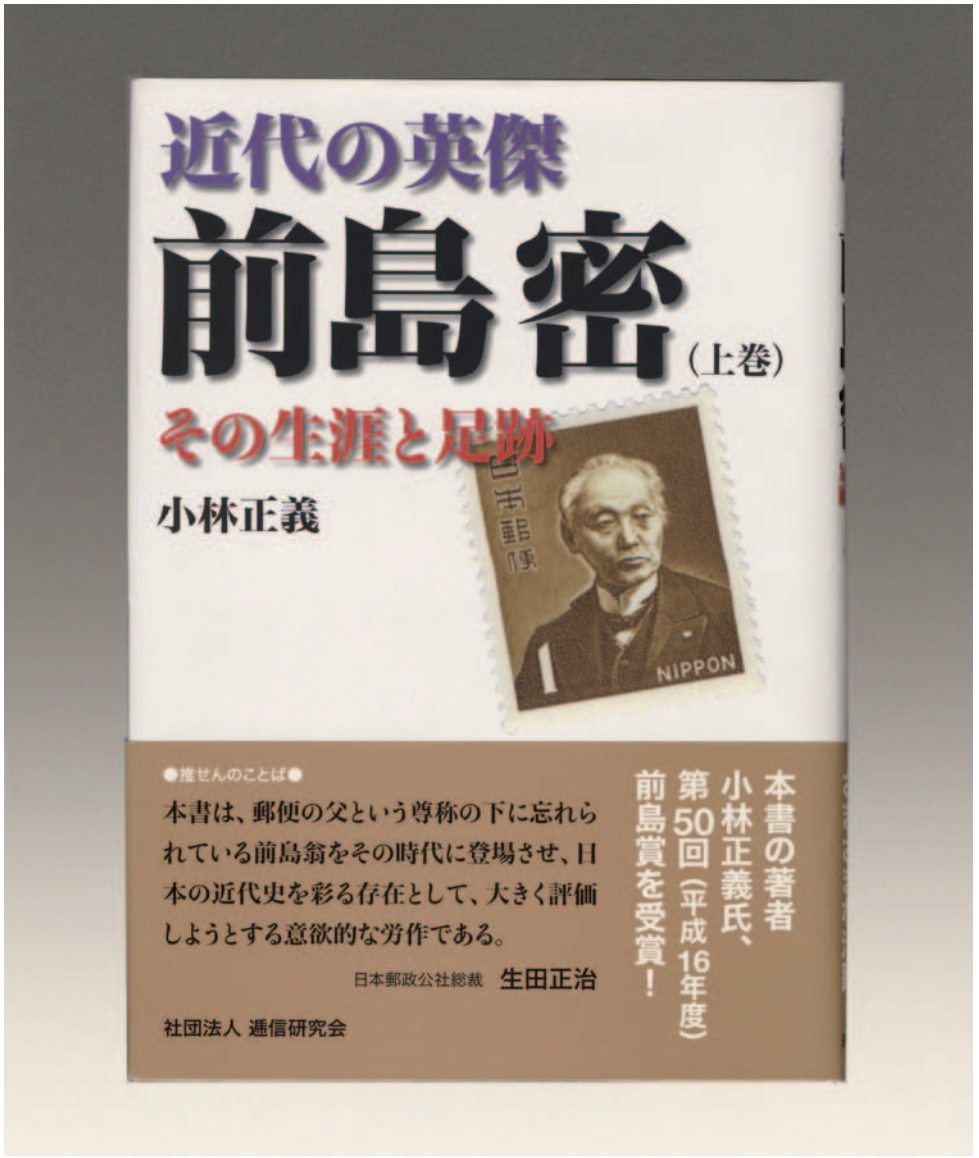
1960年埼玉県生まれ。
8歳で書道を、14歳で写真を、18歳で篆刻をはじめる。
桑沢デザイン研究所リビングデザイン研究科（グラフィックデザイン専攻）卒。
2000–2004　NAU＝21世紀美術連立展（東京都美術館）
2001　SJP展埼玉（埼玉県立近代美術館）
2002　SJP大阪国際美術展（大阪府立現代美術センター）
など

OKUMA Hajime creates works using materials found by chance, such as weathered walls, surface of rusted iron, smudges, decalcomania and grain of woods etc., through the process of "discover", "selection" and "conversion of concept" by his in-depth subconscious, concealing his body and superficial consciousness.
At age 8 started *Sho-do* (Calligraphy), at age 14 started Photography, at age 18, started *Tenkoku* (Seal-engraving).
1988　Graduated from Kuwasawa Design School, Post-graduate course, majored in Graphic Design.
2000–2004　NAU Exhibition (Tokyo Metropolitan Art Museum) / 2001　SJP Exhibition in Saitama (The Museum of Modern Art, Saitama) / 2002　SJP International Exhibition in Osaka (Osaka Contemporary Art Center) etc.

LOVE

28

「LOVE展」カタログ本文ページ　編集・組版設計・DTP組版・撮影：大熊肇（tonan）



近代の英傑 前島密 その生涯と足跡（上） 社団法人 通信研究会　2005

編集、本文デザイン、組み版、装丁を小社で担当した。なにかとタイムリーな書籍である。郵政民営化前に、なんとしても下巻を拵えなければ。

編集・組版設計・DTP組版：中妻祐子（tonan）　装丁：大熊肇（tonan）

パソコン徹底講座

読売新聞社

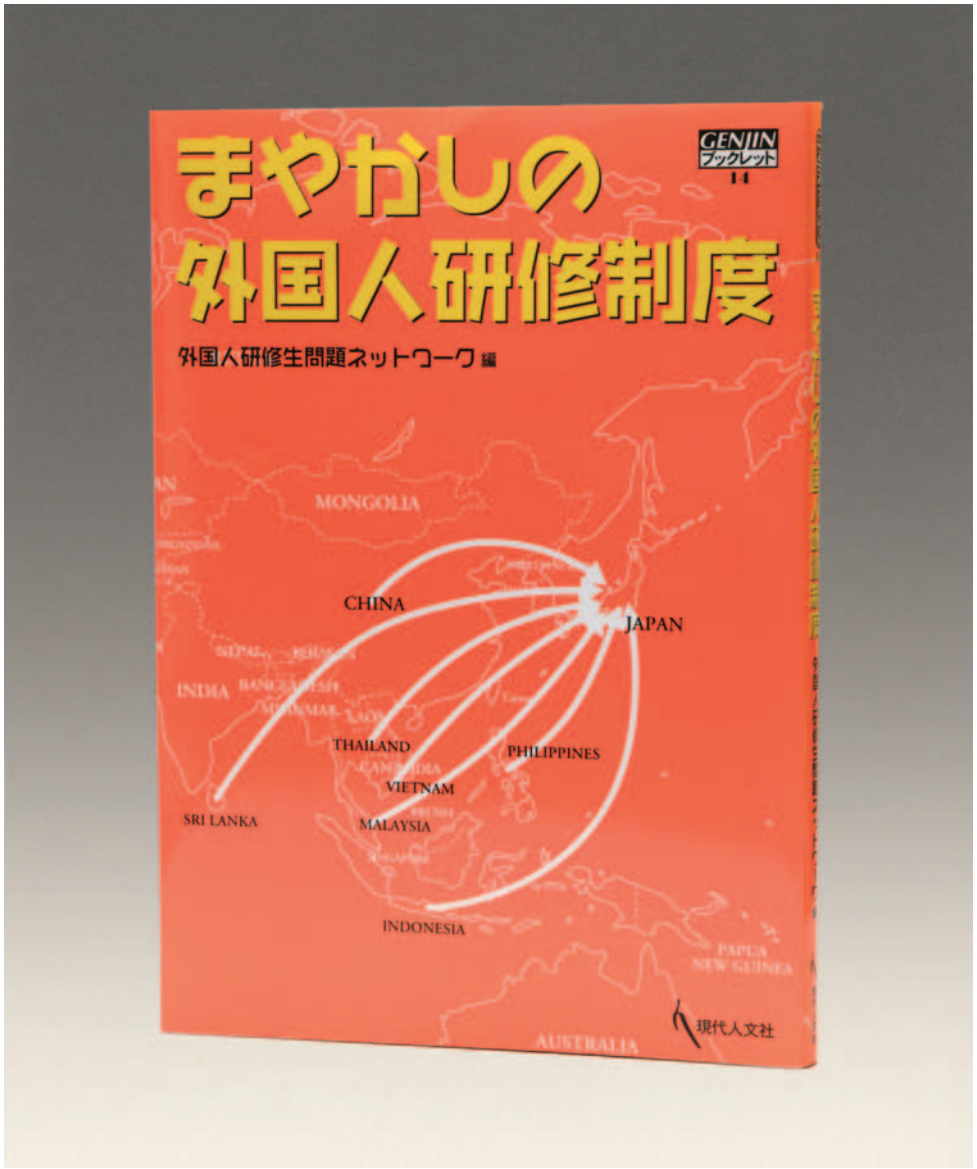
「YUMIURI PC」の連載の中で、人気が高かった特集を集めたムック。
基本的に雑誌からの流用だが、アプリケーションの進化が早すぎて、ムックにするときには、内容や画像が古くなっているので、全ページをオペレーションし直す必要がある。今までに10数冊出版されており、そのすべてを大熊が担当している。

本文オペレーション・表紙デザイン：大熊肇（tonan）

映画論叢 樹花舎

正直言ってこんなにマニアックな雑誌が、こんなに続くとはおもわなかった。

組版基本フォーマット設計・装丁：大熊肇（tonan）

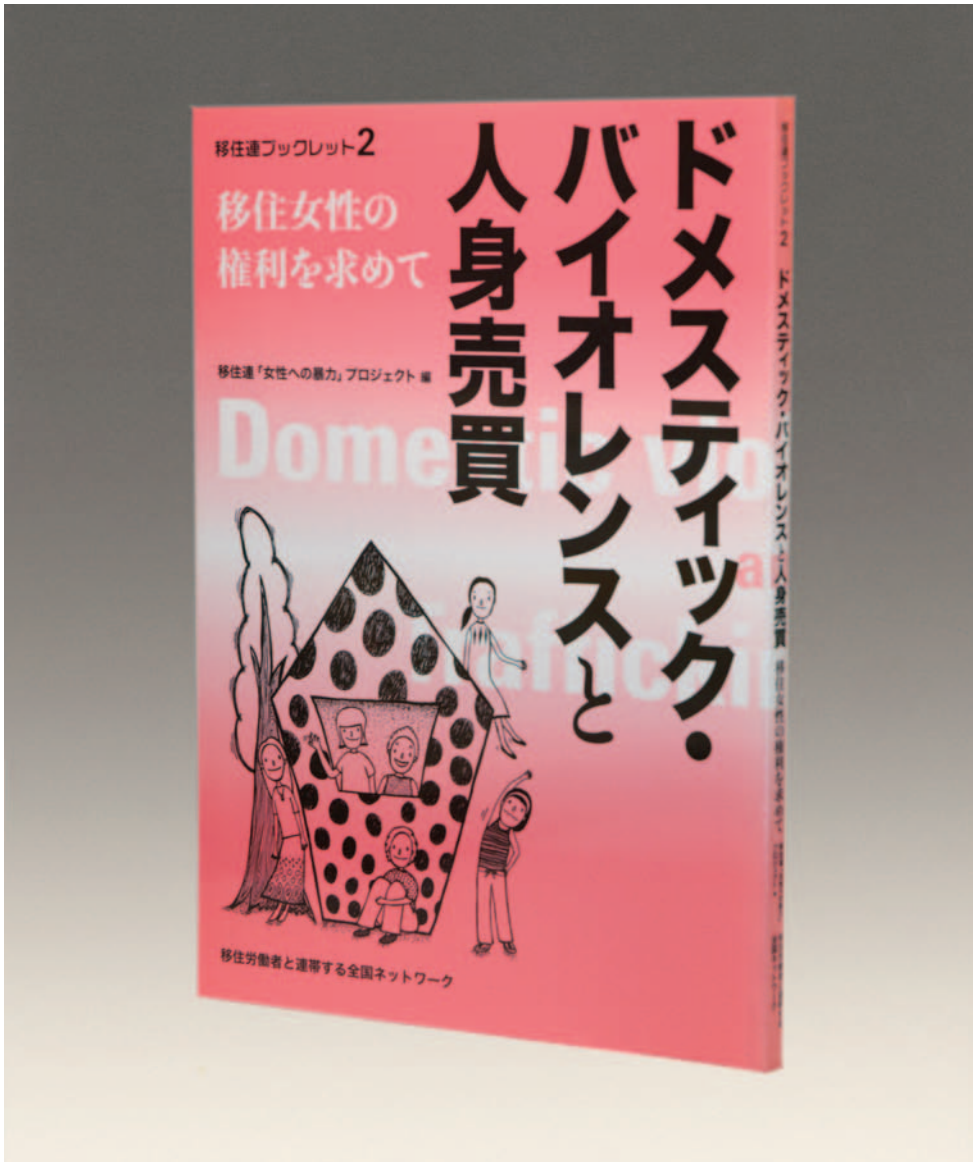


まやかしの外国人研修制度 外国人研修生問題ネットワーク　2000

編集・組版設計・DTP組版・装丁：大熊肇（tonan）　校正：中妻祐子（tonan）

まるわかり外国人医療 移住労働者と連帯する全国ネットワーク　2004

組版設計・DTP組版：中妻祐子（tonan）　装丁：大熊肇（tonan）



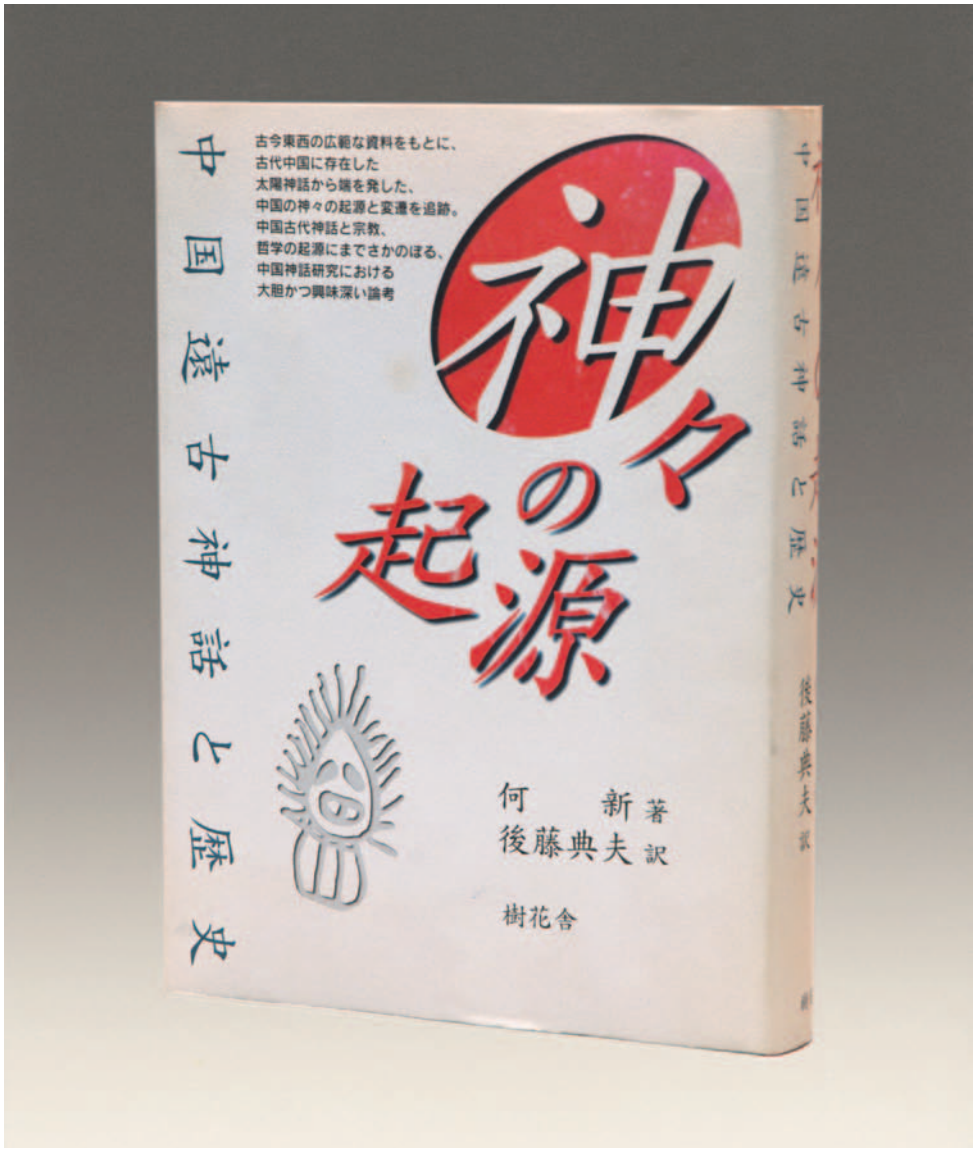
ドメスティックバイオレンスと人身売買

移住労働者と連帯する全国ネットワーク　2004

組版設計・DTP組版：中妻祐子（tonan）　装丁：大熊肇（tonan）

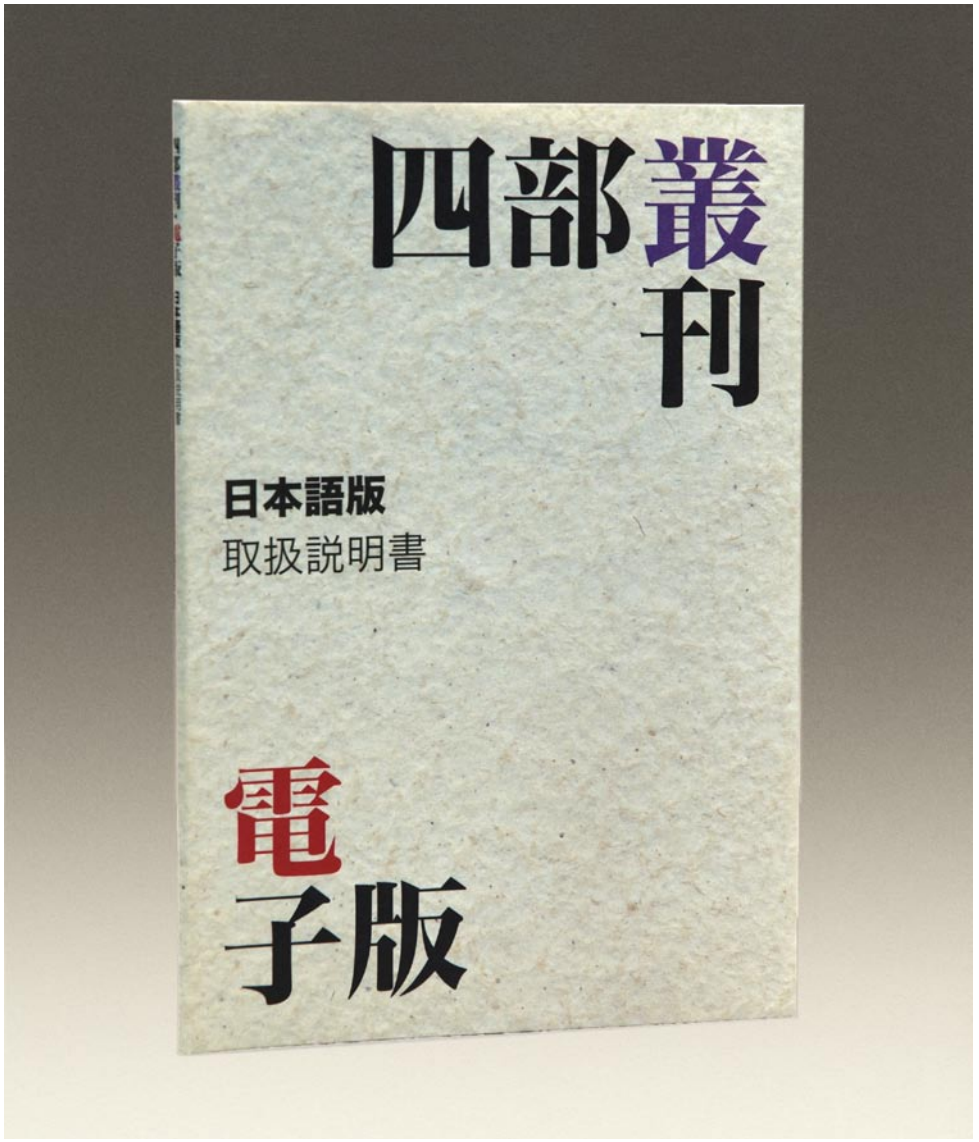
再就職支援会社全ガイド　深田洵二著　実業の日本社　2003

組版設計・DTP組版：中妻祐子（tonan）　装丁：大熊肇（tonan）



神々の起源　何新著　樹花舎　1998

組版設計・装丁：大熊肇（tonan）　作字：中妻祐子（tonan）



四部叢刊 電子版 日本語版 取扱説明書

北京書同文数字化技術有限公司 （株）カイテル 西岡漢字情報工学研究所 2003

『四部叢刊』は、1919年から1925年にかけて刊行された漢籍「善本」の大型コレクション。477種3134冊、総ページ数232,478ページ、字数9千万余りに上る。『四部叢刊電子版 日本語版』はその完全電子版の日本語版。正確、迅速な「全文検索」、「分類検索」が特色。

組版設計・DTP組版：中妻祐子（tonan） 装丁：大熊肇（tonan）

ありがとう 服部サク子著 自費出版 1997

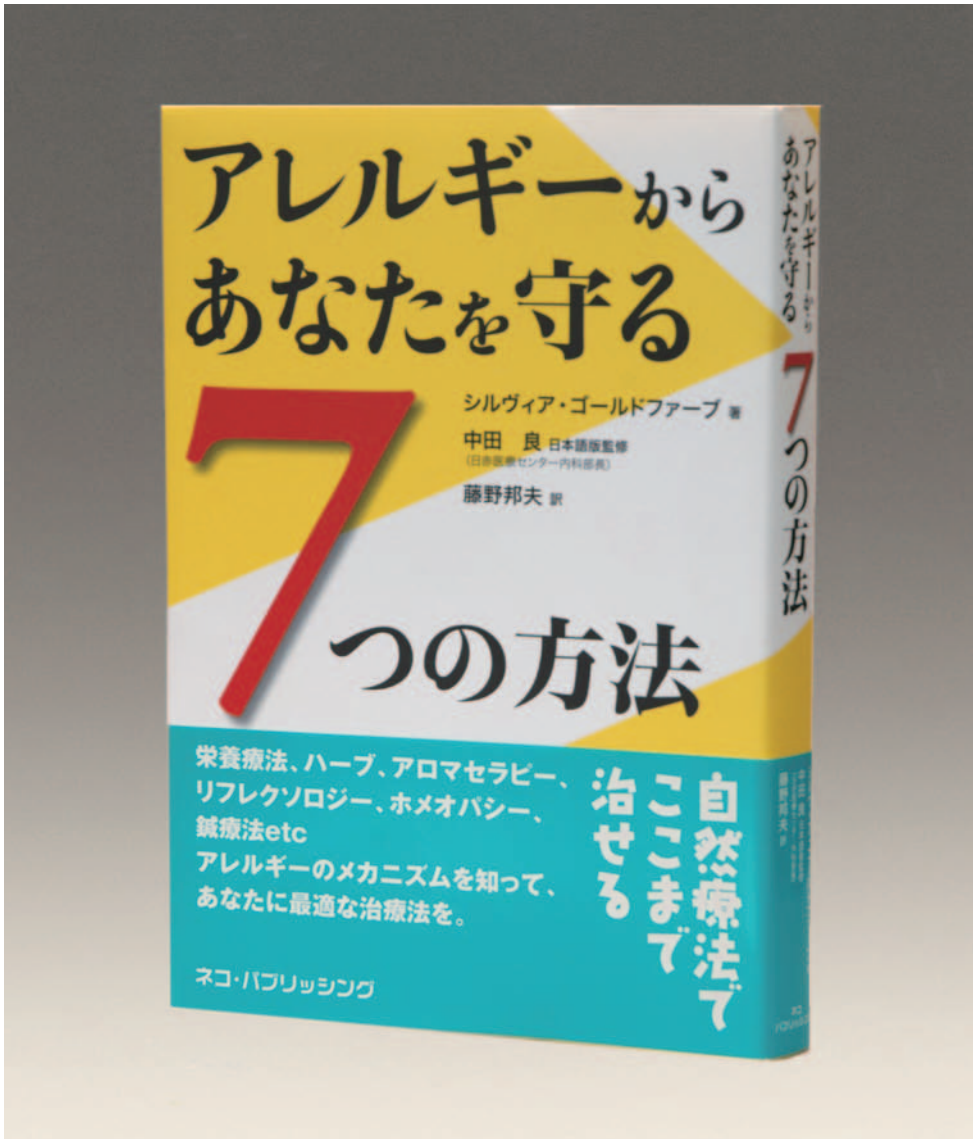
自費出版を馬鹿にしていた大熊の認識を改めさせた本。

夫の事故と事業の失敗、借金取りに居留守を使う毎日、夫の死、子育て、慣れない水商売、再婚などの体験が飾らない文体で切々と綴られている。組版をしながら、「人それぞれにこんな物語があるのか」と涙が出そうになった。

組版設計・DTP組版・装丁：大熊肇（tonan）

若い記者たちへ　有志記者の会編　樹花舎　2003

あるNGOのメーリングリストで、集会に必要な予算がないのだが、某団体から助成金をもらっていいか、というメールに、大熊が「もらってもいいでしょう。汚い金をきれいに使いましょう」と返信したところ、松井やよりさんから、「アジアの人たちから搾取したお金で、アジアの人の集会ができますか」と猛烈にしかられた。松井さんの悲報を聞いて、このブックレットの仕事を買って出た。　組版設計・DTP組版・装丁：大熊肇（tonan）



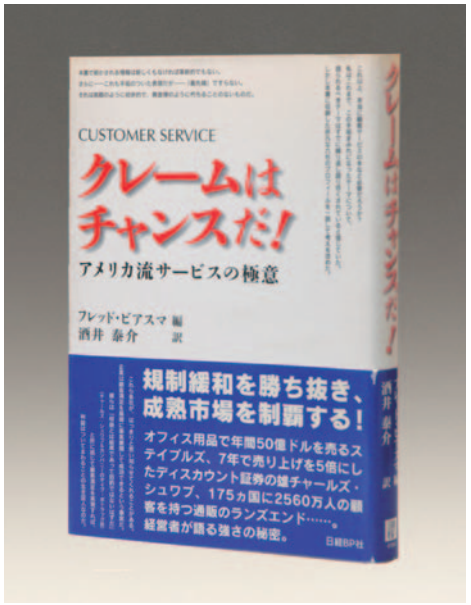
アレルギーからあなたを守る7つの方法

シルヴィア・ゴールドファーブ著　ネコパブリッシング　2002

組版設計・DTP組版：中妻祐子（tonan）　装丁：大熊肇（tonan）

検索名句秀句　村石利夫著　小学館文庫　2002

組版設計・DTP組版：中妻祐子（tonan）　装丁：大熊肇（tonan）



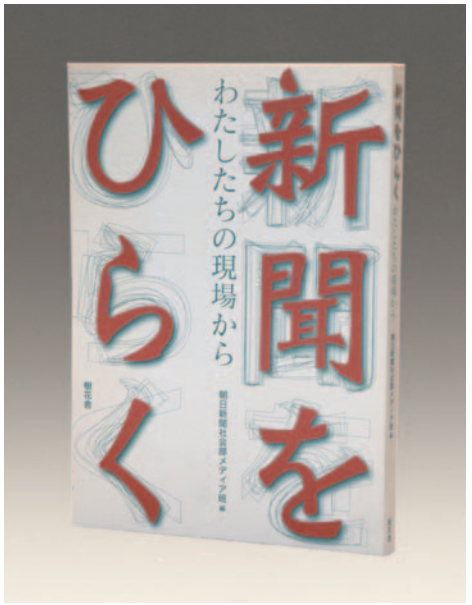
「クレームはチャンスだ！」　フレッド・ビアスマ著
日経BP社
装丁：大熊肇（tonan）

「カウンセリングマインドの重要性」　長谷川博一著
樹花舎　2004
装丁：大熊肇（tonan）

「墨に生きる　むかし絵ばなし」　木下紀久夫著　日貿出版社　1989
装丁：大熊肇（tonan）

「二一世紀の社会と学校」　二宮皓著　協同出版　2000
装丁：大熊肇（tonan）

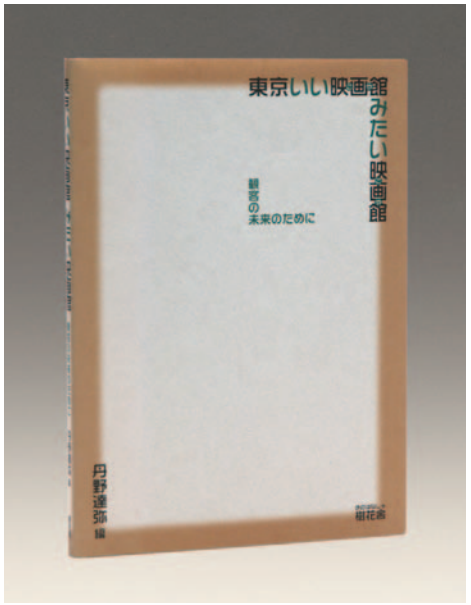
「江戸深川華づくし」 中山幹雄著　読売新聞社　1996
装丁：大熊肇（tonan）



「新聞をひらく」 朝日新聞メディア班編　樹花舎　1999
装丁：大熊肇（tonan）

「生産管理用語辞典」 日本経営工学会編　日本規格協会　2002
装丁：大熊肇（tonan）

「第二期　戦争責任」 アジアに対する日本の戦争責任を問う民衆法廷準備会編　樹花舎
装丁：大熊肇（tonan）



「東京いい映画館みたい映画館」 丹野達弥編　樹花舎　1988
装丁：大熊肇（tonan）

「最新・栄養キーワード事典」 五十嵐脩監修　池田書店　2005
写真：John Lee　装丁：大熊肇（tonan）

有限会社トナン　大熊肇＋中妻祐子
埼玉県春日部市中央6-3-15　〒344-0067
tel: 048-733-1252　fax: 048-733-1247
http://www.tonan.jp
hajime@tonan.jp